

地域に根ざした芸術文化を

天竜区二俣町にある天竜壬生ホール
のステージでは、翌日に控えた本番を前に、
ミュージカルの最終リハーサルが行われ
ていた。ミュージカルのタイトルは「カ
ッパの総理大臣」。水の大切さを伝える
ためのオリジナルの台本には、天竜川や
数々の清流を有する天竜区にふさわしい
物語が描かれている。

このミュージカルに出演する子どもも
ちおよそ30人は「龍水の都文化体験プロ
グラム」に参加し、これまでも地元元
の偉人、本田宗一郎や秋野不矩を題材とし
たミュージカル作品を手掛けてきた。こ
れらの活動は、内閣府のチャイルドユー
スサポート賞や静岡県文化財団の地域文
化活動賞を受賞するなど、地域に根付い
た芸術・文化活動として区内外におい
ても高く評価されている。舞台上での子
どもたちの演技や歌の表現力は大人顔
負け。公演の度に、見る人たちに大きな感
動をもたらしている。

世代を超えてつくる舞台

この日のリハーサルに参加していた高
校2年の田中さんは、天竜壬生ホールで
のワークショップをきっかけに、小学2
年生からミュージカルを始めた。舞台経
験なら、10年近いベテランだ。「母が申
し込みをしたのが始まりですね。もとも
とは、それほど人前に出るのが得意な方
ではなかったんですが」と田中さんは



暮らしが見える。感じる体温。
Tenryu + Plus

苦笑いでいった。「でも、やっている
うちにだんだん楽しくなってきた。今も
目立つのは苦手だけど、舞台上ならそれ
ほど気にならない。ミュージカルを始め
たことで、ちょっとは私自身も変わった
のかもしれないですね」と語る。彼女は、
高校入学後、演劇部に入部したそうだ。
「カッパの総理大臣」は、田舎町に現
れたカッパと子どもたちが、大人たちを
巻き込んできれいな川を守ろうと奮闘す
る物語だ。出演者の大多数は小学生のた
め、高校生の田中さんは大人役。また、
普段の稽古場での彼女は、小学生たちを
見守る良きお姉さんの存在でもある。

「このミュージカルには、小学校低学
年から私の母親ほどの年齢の人まで出演
しています。世代を超えて一つの作品を
作り上げていくのは、貴重な経験かな
って思います。ミュージカル仲間は大切
ですね」と田中さんは笑顔でいった。高
校の演劇部のように同世代だけで作る作
品とは、また違った面白さがあるそうだ。
「今回の作品のテーマは、水の大切さ。
その内容だけ考えれば少し難しいです
よね。でも、小さな子どもも参加して楽し
く分かりやすく伝えているのがいいん
だと思います」と今回のミュージカルにつ
いて話してくれた。

天竜区から届けるメッセージ

天竜川のすぐそばに住んでいるという
田中さんだが、普段は自然の大切さにつ

いて考えることはそれほど多くはないとい
う。それでも「大人が川でポイ捨てるのを
見れば、ヤメロ！って思います」と高校生ら
しい言葉が返ってくる。「カッパの総理大臣」
も、川がきれいな天竜に住む人たちがやるか
らこそ意義や説得力があると感じていた。「で
も、毎日ここに住んでいるから、そんな風に感
じるのは、ホントにふとした瞬間だけです
けどね」と照れくさそうに笑う。この辺りの正
直さもまた、高校生らしい。

翌日、彼女たちは本番のステージの上にい
た。満員となった観客たちは、子どもたちの
まぶしい表情と物語の世界に引き込まれて、
演者たちへ負けず劣らずの真剣な顔で舞台に
向かっていた。

ミュージカルのさまざまなシーンで聞かれ
る「川をきれいにしよう」「水を大切にしよう」
という台詞が胸に残る。台本に書かれたもの
だと分かっているながらも、子どもたちの素直
なメッセージのように感じられ、不思議と説
得力があった。田中さんの「天竜区発のメッ
セージだから伝わる」という言葉を思い出す。
彼女もまた、生き生きとした表情で舞台で歌
い、踊った。

そして、エンディングの大合唱で、会場全
体の感動はピークを迎える。客席からは割れ
んばかりの拍手。子どもたちのこの日一番の
笑顔に、こちらも心が震えるのをはつきりと
感じた。彼女たちの大きなメッセージが、多
くの人たちの心に届いた瞬間だ。

「私たちの川をみんなで守ろうよ」と。

川がきれいなまちの人たちが
演じるミュージカルだから、意義がある。

てんりゅう暮らしの見本帖

「ミュージカルを演じる人」

